



写真-1 屏風岩橋から「屏風岩」を撮影（平成27年5月）

### ■ 『摂津名所図会』にうたわれた北摂第一の名勝地

上の写真-1は、猪名川町（いながわちょう）北田原にある景勝地『屏風岩（びょうふういわ）』を、主要地方道12号・川西篠山線の屏風岩橋から撮影したもので、猪名川の流れの向こうにそそり立つ高さ30m、幅100mにわたる断崖絶壁が、まるで屏風を立てたような景観をつくり出していることからその名が付けられたそうです。

江戸時代の観光ガイドブックである『摂津名所図会\*1』には「北摂第一の名勝地」とうたわれていて、以下のような説明が付されています。（『摂津名所図会』巻之七（豊嶋郡・河邊郡）に屏風岩の説明文、巻之八（河邊郡）に絵）

「屏風巖 大井村にあり。岩の形屏風を立てたるに似たり。数六枚。小大あり。高さ凡（すべ）て二十間許（ばかり）、幅十間餘、前に流（ながれ）あり、多田川（猪名川）の上なり。岩上に街道ありて、丹波笹山（篠山）の通路なり。清流岩下に激して、風致斜（ななめ）ならず。春は岩間に山躑躅（やまつじ）咲き乱れて、遠近ここに来り風色（ふうしよく）に興ず。」

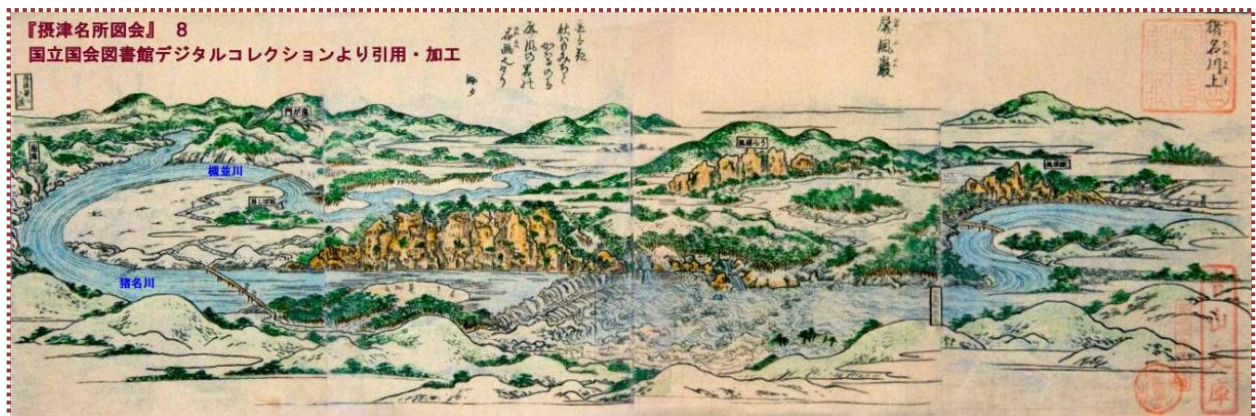


写真-2 『摂津名所図会』屏風岩

屏風岩は、猪名川溪谷県立自然公園の中を北から南へ流れ下る猪名川が、北摂群山岳地を侵食して造り上げたものです。

※1 『摂津名所図会』：摂津国の名所を絵画と文章で紹介した地誌。京都の町人・吉野屋為八が計画し、寛政8（1796）年～寛政10（1798）年に刊行された9巻12冊からなる通俗地誌であり観光ガイドブックでもあった。編集は俳諧師・秋里籬島（りとう）が担当し、絵は竹原春朝斎（しゅんちようさい）が担当。秋里籬島による名所の由来記、竹原春朝斎による俯瞰図を多用した挿絵が特徴である。

### ■ 『摂津名所図会』に紹介された屏風岩周辺の名所

屏風岩から北東に数分歩くと道の駅「いながわ」があります。駅裏を猪名川が流れていて、春には桜、夏には川遊びが楽しめます。その情報コーナーには屏風岩周辺のオモシロスポットが紹介されています。この情報を参考にし、『摂津名所図会』に掲載されている『裏屏風岩』や『烏帽子岩（えぼしいわ）』、『鬼が門（おにかかど）』を探して現地を歩いてみました。



図-1 屏風岩周辺の地図

#### ① 烏帽子岩

猪名川の左支川・槻並（つくなみ）川に架かる宝地口橋の下流約80mの所にあるでっかい岩です。烏帽子（えぼし：元服した男子のかぶり物）の形からその名がついたとか。岩の高さは槻並川の護岸より少し高めです。

昭和62（1987）年の河川改修<sup>※2</sup>の際に、烏帽子岩が川の中央にあって河積を阻害していたので写真-3のように左岸側に移したそうです。移設後、堤外水路が岩を避けて設けられています。

所在地名は、猪名川町万善（まんぜん）字烏帽子岩。

『摂津名所図会』では以下の説明が付されています。

「烏帽子岩、同村（大井村）の北にあり。形によって名とす。又萬善村にも同石（おなしいし）の名あり。高さ一丈五尺。」  
1丈は約3mなので1丈5尺は約4.5mです。



写真-3 烏帽子岩

※2 河川改修：昭和52（1977）年度に着手した河川局部改良事業。

## ② 鬼が門

写真-4 は、烏帽子岩近くの槻並川の右岸堤防から下流に50m ほど行った所から望遠レンズで鬼が門（おにかかど）を撮影したものです。鬼が門は、左右に大きな岩を立て、その上にふたをするように岩が載り、門のような形になっています。門の空間は、大人が楽に通り返けられるほどの広さがあり、人の力で組み上げるのは難しく、鬼が造ったのではないかと、言われたことからその名前がついたそうです。所在地名は、猪名川町万善字鬼が門。

『摂津名所図会』では以下の説明が付されています。

「鬼が門 同所（大井村）の山手にあり。形石門（せきもん）の如し。人力に及びがたし。鬼神（きじん）の所造なりとて名に呼ぶ。」



写真-4 鬼が門

## ③ 裏屏風岩

屏風岩のちょうど裏側（東側）に当たることからこの名が付いています。ただ、「裏」というだけあってあまり注目されていないため、案内板もないので探すのに苦労しました。宝塚土木事務所のF 企画調整主幹から、道の駅「いながわ」の情報コーナーに裏屏風岩の写真があったように記憶していますが…、とのことで、早速道の駅に行って写真-6 と場所を確認のうえ現地に行きました。筆者が現地に行った時は写真-7 のように樹木やツル性植物が岩を覆っていて、裏屏風岩を見ることはできませんでした。

裏屏風岩の近くに住んでおられる奥さんの話では、「ツルを刈って岩が見えるようにした方がいいと思うのですが、岩には縦横に割れ目がたくさん入っているのでツルは刈らない方がいいのかも、と思って……。ツルの名は、何とかカズラといって5月頃に白い花をつけいい香りがするんですよ。」とのこと。

確かに冬場は岩の割れ目に水が入り、それが凍結して割れ目が拡大し落石につながる恐れも考えられますが、当地域はそれほどの寒冷地ではなく、それよりもツルの根や木の根が割れ目に入り込んで伸長していくことで割れ目を拡張するので、むしろ刈った方がいいのでは。

なお、白い花が咲くツル性植物の名は多分「スイカズラ」です。芳香を放つので刈るのは惜しい。



写真-5 スイカズラ（県立フラワーセンターにて）

裏屏風岩の所在地は、猪名川町北田原字屏風浦。『摂津名所図会』では以下の説明が付されています。

「裏屏風岩 同村（大井村）の中にあり。初の屏風岩より少し小さし。同じく六箇あり。」

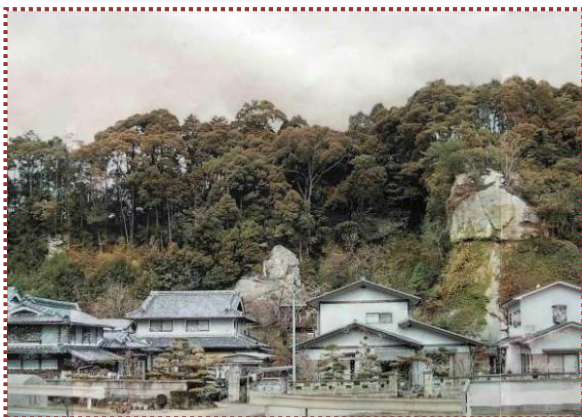


写真-6 裏屏風岩（道の駅いながわ情報コーナー展示写真から引用）

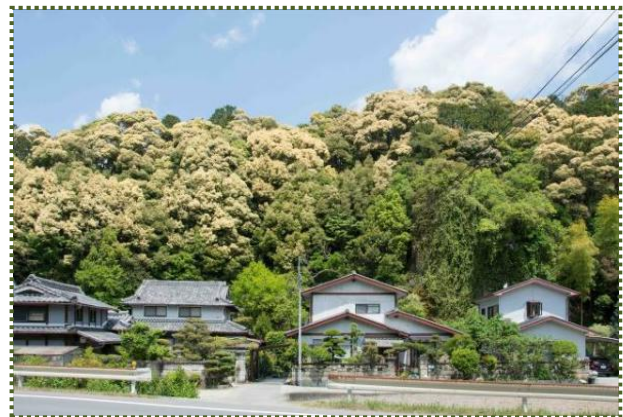


写真-7 樹木で覆われた裏屏風岩（5月中旬撮影）

## ■ 兵庫県版レッドリスト（地質）Bランクの地

「屏風岩」は、「兵庫県版レッドリスト2011<sup>※3</sup>」において、分類区分が「地層、河食<sup>※4</sup>（かしょく）（屏風岩、おう穴<sup>※5</sup>）」で、地質が有馬層群中部の僧川凝灰質泥岩層とされています。

一方、『兵庫の地質』を見ると、屏風岩周辺地は玉瀬結晶質凝灰岩（At）と僧川碎屑岩類（Ab）、玄能池碎屑岩類（Ag）が接し、その東側は花崗斑岩の岩脈（Gp）を挟んで超丹波帯地層群（Usl、Uss）が分布していて、地質的に複雑な地域となっています。

**※3 兵庫県版レッドリスト2011**：兵庫県では、絶滅の危機にある貴重な野生生物、地形、地質、自然景観などを保全し、生物多様性を確保するため、平成7年に他県に先駆けて、「兵庫の貴重な自然—兵庫県版レッドデータブック—」を作成した。

平成15（2003）年には、貴重な生物のモニタリング結果などをもとに、「改訂・兵庫の貴重な自然—兵庫県版レッドデータブック2003—」を作成した。その後、新たな生物情報の蓄積が進んできたことに加え、平成21（2009）年3月に策定した「生物多様性ひょうご戦略」に基づく行動計画の一環として、平成21（2009）年度からレッドデータブック改訂作業に着手、新たに生態系という分野を設けてレッドリストの選定作業を行った。

その中で地形・地質は、学術的に貴重なものや形状、分布がユニークなもの、自然や土地の成り立ちを示す典型的なもの、自然環境と人間生活との関わりを密接に示すものなどの基準に該当するものを貴重なものとした。選定された箇所は、Aランク、Bランク、Cランク、要注目の4つに区分され、「屏風岩」が該当するBランクは、Aランクに準ずるもので、地方的価値、都道府県の価値に相当するものとされている。

**※4 河食（かしょく）**：河川による侵食作用のこと。河食には物理的に働く削磨または磨食作用と、化学的に働く溶食とがある。削磨作用とは流水の運ぶ砂礫の衝突や磨耗により河床や河岸を削り取る作用である。未凝固の堆積物からなる河床や河岸では水流のみの衝撃によっても侵食される。溶食は流れが岩石などの異物質を溶解して運搬除去する過程であるが、河床や河岸における溶食は、接触時間が短いため微々たるもので、河水中に含まれる多量の溶存成分は地下水からの供給による。河食の働く方向によって下刻と側刻に分けることがある。河食による地形の進化のプロセスを河食輪廻（りんね）という。

**※5 おう穴**：ポットホールともいい、川の侵食によって生じた円形の穴。河床の軟弱部に水流の侵食が働いて浅いくぼみができ、この中に礫が入ると渦流によって回転して円形の穴が拡大し、礫も摩滅して丸く縮小する。直径、深さともに数mに及ぶものもある。

## ■ 大伴大江丸の句碑

平安時代に西国霊場を復興した花山（かざん）法皇は、永祚（えいそ）元（989）年この地を訪れ、その素晴らしい景色をほめたたえています。

花山法皇がこの地に足を運ばれてからおよそ800年後の寛政9（1797）年4月、大坂の俳人・大江丸<sup>※6</sup>（おおえまる）とその一門が上野（現在の猪名川町役場付近）の万屋嘉兵衛に誘われてこの地を訪れ、川遊びをした際に詠んだのが下記の句です。

当時上野にあった温泉「照春館」に泊まり、屏風岩周辺で川遊びを楽しんだ彼らは、何度か猪名川を訪れ句会を催しています。

若葉まで 百年ののち ここに来む

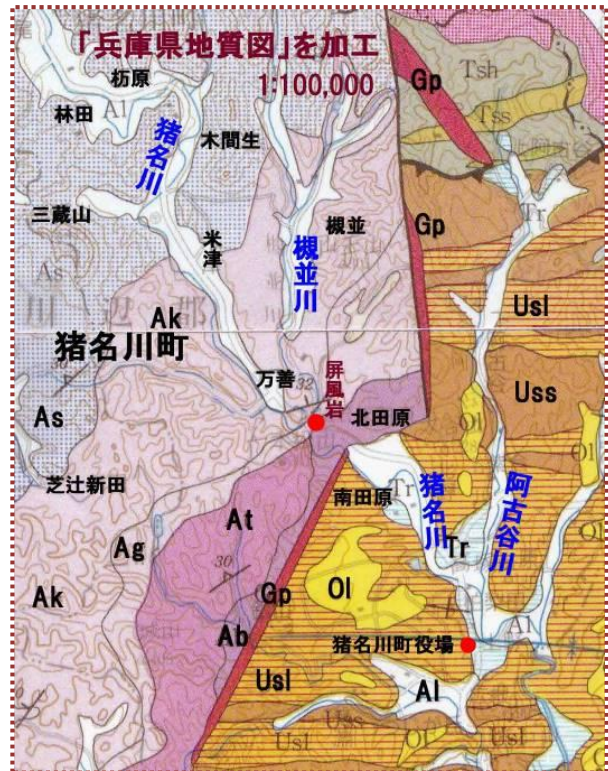


図-2 屏風岩周辺の地質

- At : 玉瀬結晶質凝灰岩
- Ab : 僧川碎屑岩類
- Ak : 境野溶結凝灰岩
- Ag : 玄能池碎屑岩類
- Gp : 花崗斑岩の岩脈

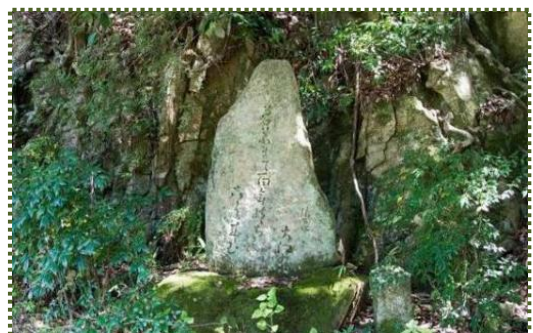


写真-8 大江丸の句碑

大江丸は大坂で大和屋、江戸で嶋屋という三都随一の飛脚問屋を営むとともに、天明・寛政俳壇で活躍し、小林一茶にも影響を与えた彼は、狂歌も俳画も巧みだったそうです。伊丹の柿衛（かきもり）文庫に下絵のある「大井屏風石之図」は、裏屏風岩近くの東光寺本堂に掲げられており、余白にこの句が書かれているとか。

写真-8 の句碑は昭和 27（1952）年に北摂郷土史学連合会によって建てられたもので、屏風岩北端の里道脇にあります。

※6 大江丸：享保 7（1722）年 10 月 5 日～文化 2（1805）年 3 月 18 日。江戸時代中期の俳人。晩年に号した大伴大江丸（おおとものおおえまる）の名で知られる。家業上諸国を旅したので交際範囲がきわめて広く、またたいへん筆まめで、そのうえ長寿でもあったので、残した紀行文や随筆、そして発句などは膨大な数にのぼる。そのなかでも『俳懺悔』と『俳諧袋』は、大江丸の作品や心境を知ろううえのみならず、当時の俳壇の記録としても貴重な資料になっている。

## ■ モノローグ

江戸時代、庶民は観光旅行を禁じられていましたが、信仰上の旅行は許されていたため、“お伊勢参り”の名目を借りて観光旅行に出かけていたそうです。江戸中期から後期にかけて、『摂津名所図会』や『播州名所巡覧図絵』（1804）といった観光ガイドブックが数多く出され、享和 2（1802）年に出版された『東海道中膝栗毛』は大評判となり、当時の人々の旅への興味を駆り立てました。

ところで、弥次さん・喜多さんより 100 年以上前に全国を旅して回った松尾芭蕉（1644～1694）は、苗字・帯刀こそ許されていましたが身分は武士ではなく農民でした。旅の資金や関所の通行はどうしたのでしょうか。

### 【参考資料】

- 1 『摂津名所図会』 秋里籬島編集 寛政 10 年
- 2 『兵庫の地質』 兵庫県土地質図編纂委員会 平成 8 年 3 月
- 3 『ひょうごの環境』 兵庫県農政環境部 環境創造局自然環境課 HP
- 4 『第 32 話 大江丸の猪名川清遊、第 138 話 鬼が門と烏帽子岩』 猪名川町 HP
- 5 『東海道中膝栗毛、松尾芭蕉、モチツツジ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 6 『河食』 日本大百科全書・小学館
- 7 『おう穴』 ブリタニカ国際大百科事典

### モチツツジ（餅躑躅）

ツツジ科ツツジ属に属する落葉（半落葉）低木。主に低山地や丘陵地に自生し、高さ 1～2m になる。明るい林（アカマツ林など）のなかで多くみられ、通常 4～6 月に開花する。花のがくや柄、葉（両面）、若枝、子房、果実に腺毛が多く見られ、そこから分泌される液滴によって粘着性を持つ。そのため、ここに多くの昆虫が捕らえられているのが観察される。この腺毛は花にやってくる昆虫（花粉媒介にあずかる昆虫を除く）を捕殺して、昆虫による花の食害を防ぐために発達したものらしい。



写真-9 屏風岩の上部へ登っていく山道沿いに咲いていたモチツツジ

※発行：令和 2（2020）年 8 月 『ひょうご水百景』 No.111

改訂：令和 8（2026）年 4 月 『ひょうご水百景』 No.111